

2021.4.11説教
復活節第2主日

「見ないで信じる」

ヨハネ20章19-31

◆イエス、弟子たちに現れる

20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

20:20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。

20:21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

20:22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。

20:23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

◆イエスとトマス

20:24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

20:25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、

この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

20:26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

20:27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

20:28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。

20:29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

◆本書の目的

20:30 このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。

20:31 これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とがあなたがたにあるように。

ヨハネ福音書が伝える主の復活は、こうである。

週の初めの日のまだ夜明け前、マグダラのマリアは十字架で亡くなったイエス様の亡骸をお納めした墓へ行った。すると、墓を塞いだ石が取り除けてあるのを見た。

マリアはイエス様の弟子・ペトロのところへ走って行って、その様子を伝えた。そこで、ペトロともう一人の弟子は墓へと走った。墓に入ってみると、ご遺体を包んであった亜麻布だけが置いてあった。彼らは、「見て、信じた」。

彼らが見たものは、空っぽの墓だけであった。

彼らが信じたのは、マリアが告げたように、墓の入り口の石が取り除けてあったこと、そして、主の亡骸が取り去られていたことであろう。

こうして、二人の弟子たちは家へ帰って行った。

残されたマリアは、墓の外に立って泣いていた。泣きながら墓の中を覗くと、二人の天使が見えた。振り返ると人影が見えた。その人影こそ復活されたキリストであったが、マリアには分からなかった。

「マリア」と呼びかけるキリスト、これによって主であると気づいたマリア。「わたしは上る」とおっしゃるキリスト。これを弟子たちに伝えるよう命じられると、マリアは弟子たちの所へ行き、「わたしは主を見ました」と証言した。

この復活の朝の出来事の続きが、本日の御言葉です。

19節、「その日、すなわち週の初めの日の夕方」という場面から始まります。

「弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」とあります。イエス様を十字架に追い遣った民衆から、お前たちも仲間だと迫られることを怖れていたのでしょう、彼らの隠れ家には鍵がかけられていました。

そこへ復活のキリストが来て、彼らの真ん中に立たれたのです。くださった御言葉は「平和」でありました。

20節、「弟子たちは、主を見て喜んだ」とあります。

イエス様と弟子たちの出会いから復活までをたどるとき、イエス様と出会った弟子たちの喜びはいかほどであったかは非常に興味深いものでありますが、実は多くは書かれていないのです。

ヨハネ福音書においては、復活のキリストとの再会において、この20節が「弟子たちは主を見て喜んだ」と伝えるばかりです。

もう一箇所、福音書が伝える、弟子たちがイエス様と出会った喜びもまた、復活のキリストとの再会の場面です。こちらはルカ福音書の24章であり、来週の聖書日課となっています。

イエス様の母・マリアにおいては、受胎告知から始まって復活に至るまで喜びは綴られず、沈黙が通されています。ただ一箇所、マタイ福音書だけが、復活の朝、女性たちが「怖れながらも大いに喜び」と、控えめにその胸の内を語っています。初めの福音書・マルコにおいては、喜ぶ姿はいっさい描かれてはいないのです。

20節に戻りますと、隠れ家の弟子たちは主を見て喜んでいます。

25節、ところが、その場に居合わせなかった弟子のトマスは、仲間たちの「わたしたちは主を見た」という証言を受け入れることはできませんでした。

それどころか、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」と、さらにかたくなな態度を取っています。

トマスのかたくなな態度が悲しいでしょうか？

しかし、これはその場にいなかったすべての者の態度を映すものでもありましょう。

時は十字架から三日目、弟子たちはユダヤ人たちを怖れて隠れ家におり、戸には鍵をかけていたのです。緊迫した状況です。

では、トマスはどこにいたのか。

ほかに隠れるところがあったのでしょうか。

イエス様を喪った後、行く当てがあったのでしょうか。

トマスが、自分の目で見、その手で確かめてみなければ信じない者であったならば、自分の足で失われたイエス様の亡骸を探し回っていたのではないかと想像されます。

もし、他の弟子たちが感じていたように、ユダヤ人から隠れなければならないような事態であったならば、トマスが無事に隠れ家へと帰り着くことができたものだろうかとも思います。

いずれにせよ、トマスは隠れ家にはいなかったのです。

トマスは、命知らずの人であったと言えます。

というのは、ヨハネ福音書11章14節以下を見ますと、

「そこでイエスは、はっきりと言われた。『ラザロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。』

すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、『わたしたちも行って、一緒に死のうではないか』と言った。」と語った言葉が記されています。

自分の死を恐れず、失ったイエス様を探し求めることは、トマスには当然の行動であったとも言えるでしょう。

では、トマスはどこにいたのか。

彼はユダヤの民衆の中にいるほかはなかったでしょう。ゴルゴタの丘から遠くない谷間に失ったイエス様を探し、イエス様が捕らえられた最初の場所であるゲッセマネの園にも赴いたことでしょう。町に戻って路地裏をくまなく探し回ったことでしょう。ユダヤの民衆から隠れることはできず、隠れることもなく、イエス様を捜し求めたのではなかったのか。

トマスは、十字架の出来事から三日後の町の様子を目の当たりにしたはずです。その後の人々の様子を見たでしょう。

そこで彼が見たものは、何事もなかったかのような町であり、民衆の姿であったのかもしれません。彼は無事に帰ってきたのですから。

命懸けで失われたイエス様を探し回ったトマスに、隠れ家で閉じこもっていた仲間たちが「わたしたちは主を見た」と告げたのです。トマスにとっては受け入れがたい言葉でありました。

それから八日の後、ついに、このトマスの前にも復活のキリストは立たれました。

キリストは、トマスが何も言わぬ前に、手とわきとを差し出されました。そこには、十字架の釘跡、そして死に至らしめるための槍によるわき腹の刺し傷があったのだと思われます。

そして、「信じない者ではなく、信じる者となりなさい」と呼びかけられました。

信仰は今も同様です。

キリストからの、「信じない者ではなく、信じる者となりなさい」との呼びかけでありましょう。

もはやトマスには、イエス様が身に帯びられた十字架の傷跡は不要でした。彼は、主の傷跡を確かめるまでもなく、「わたしの主、わたしの神よ」と告白しています。

キリストはトマスに、さらに呼びかけます。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」と。

「見ないのに信じる人は、幸いである」、この御言葉は、ヨハネ福音書の最後のメッセージとなっています。

21節、復活のキリストは、弟子たちに「平和」の挨拶と共に、「聖霊を受けなさい」と呼びかけ、赦しのために遣わされます。

「見なければ信じない」と豪語したトマスをも世界へと派遣されます。

トマスは命懸けで探し求めたにもかかわらず、主を見出すことはできませんでした。しかし、復活のキリスト自らがトマスを求め、面前に立ってくださいました。

トマスが主を探し出したのではなく、キリストがトマスを見出してくださったのです。

さらに、「見なければ信じない」者に、「見ないのに信じる人は、幸いである」との言葉をかけてくださいました。

そして、これ以後、聖霊を受ける出来事を通して、トマスはキリストを証言する者として立たされ、多くの「見ないのに信じる人」たちを生み出す伝道者とされていくこととなるのです。

トマス自身が、「見なければ信じない」者であったからこそ、「見ないのに信じる」ことの尊さが分かる者とされたのです。

信じ合えないことが世界の分裂を引き起こしています。私たちは、信じ合うことから平和を創り出すものとして出かけて行きたい。

「望みの神が、信仰からくるあらゆる喜びと平安とをあなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを望みに溢れさせてくださいます」